元立北遺跡（もとだてきた）

遺跡番号　202-688
調査次数　第1次
所在地　山形県米沢市大字川井字元立
北緯・東経　37度55分21秒・140度8分18秒
調査委託者　米沢市産業部商工課
　　山形県置賜総合支庁建設部道路計画課
起因事業　（仮称）道の駅よねざわ
　　主要地方道米沢高畠線道路改築事業
調査面積　1,000㎡
受託期間　平成28年4月1日～平成29年3月31日
現地調査　平成28年4月25日～7月13日
調査担当者　渡辺和行（現場責任者）・森谷康平・
　　安達将行・吉田満・三浦一樹・山田めぐみ
調査協力　米沢市建設部土木課・米沢市教育委員会・置賜教育事務所
遺跡種別　集落跡
時代　縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代
遺構　竪穴住居跡・河川跡・溝跡・土坑・柱穴・性格不明遺構
遺物　縄文土器・土師器・須恵器・石製品・木製品・金属製品（文化財認定箱数：11箱）

遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

元立北遺跡は、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地上に位置し、現況は田園が広がっている。標高は約240mを測る。平成27年度に発見・登録された遺跡で、遺跡範囲は南北約40m、東西約60mを測る。

遺構と遺物

調査区は事業区域の東側に位置し、調査対象範囲は南北約40m、東西約30mの台形状を呈する。遺構検出面は表土下約30～40cmで確認された。

確認された遺構・遺物の年代は主に古墳時代である。僅かに縄文時代、奈良・平安時代の遺構・遺物も確認されている。調査区は竪穴住居跡2棟と河川跡で、調査区の約半分の面積を占めている状況で、残りの半分では小規模な溝跡や土坑、柱穴等が広く分布している。

調査区中央部で検出されたST51竪穴住居跡は大型の住居で約8.1×7.6mの方形を呈し、深さは約20～30cmを測る。カマドは南辺に位置する。東側に位置するST60竪穴住居跡は、調査区外へ延び全体は把握でき

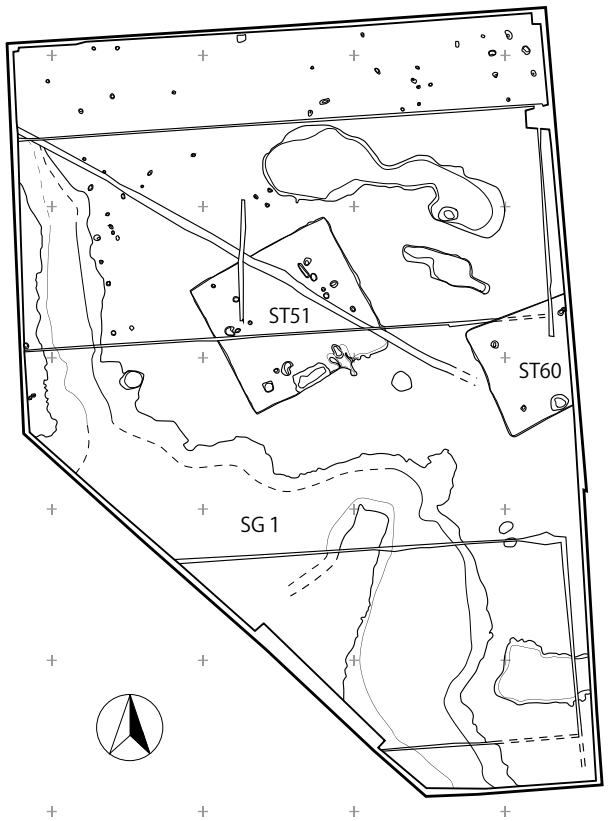

図1　遺構配置図（S＝1/400）

ないが、ST51 竪穴住居跡に比べ規模が小さいものの、主軸方向は類似している。ST51 竪穴住居内の床面には炭化した木材が中央から放射状に横たわる状況や焼土が確認されることから、火災のため焼け落ちた焼失住居と推測される。

出土遺物は２点の須恵器ハソウが注目される。陶邑(すえむら)窯跡群（大阪府堺市）の産出と思われるが定かではない。形状は共に陶邑編年の TK23（古墳時代中期後半：５世紀後半）に相当する。また口縁部から頸部にかけて、意図的に打ち欠いたような割れ方を呈している。土師器の器種には坏・甕・壺・甑(こしき)が確認されている。僅かではあるが黒色土器（土師器坏）の出土もあり、須恵器ハソウの年代と相違ない様相である。他に、石製模造品(もぞうひん)や大型の砥石、鉄滓(てっさい)等も出土している。

SG 1 河川跡は調査区南西部に位置する。調査区南側から北西方向へ蛇行しながら流れている。最大幅約 7.2 m、深さ約 60 ～ 80cm を測る。河川跡からは縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺物が出土している。

河川跡出土の縄文時代の出土遺物は、縄文土器の破片資料のみで、全体を把握できる資料は皆無である。器種は深鉢・鉢があり、年代は晩期（後葉）である。古墳時代については、ST51 竪穴住居跡の年代と同様、中期頃の土師器と４点の石製模造品が出土している。石材は緑色片岩であろう。形状は２つの穿孔を有することから、鏡を模造したものと推測される。ST51 竪穴住居跡で出土した石製模造品も同じ形状を呈する。奈良・平安時代については、時期幅のある年代の土師器・須恵器が出土している。

まとめ

今回の調査では、古墳時代中期頃の集落跡を確認した。西側に位置する馳上(はせがみ)遺跡でも同時期の集落が営まれており、広く同じ集落域と考えることもできるが、今後詳しい検討が必要である。ST51 竪穴住居跡からは他地域との交流を示す須恵器ハソウ、並びに石製模造品、大型の砥石、鉄滓など多種にわたる遺物が出土している。一般的な住居とは異なり、工房などの施設利用が考えられるだろう。また、縄文時代、奈良・平安時代の遺物を確認できたことで、当遺跡または周辺に集落跡が存在していたことが推測される。

写真１　調査区全景（東から）

写真２　ST51 竪穴住居跡完掘状況（西から）

写真３　須恵器ハソウ出土状況（ST51 竪穴住居跡）

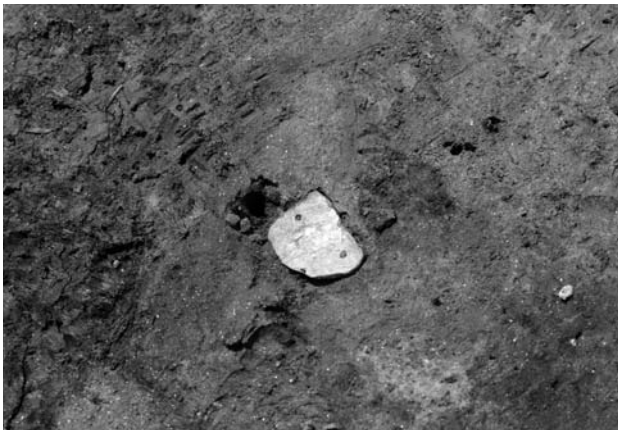

写真４　石製模造品（ST51 竪穴住居跡）